鳥取の民話

22

収録・解説　酒井董美（ただよし）

やっぱりだまされ坊主に

カミソリ狐

（八頭郡智頭町波多）

語り手　大原寿美子さん（明治40年生まれ）
昭和60年8月15日収録

あらすじ

昔。おさん狐（きつね）といって人をだます狐がおった。

若い者宿へ集った若者の一人が「狐を捕まえる袋を持って出る」と出て行ったら、おさん狐が来た。若者は「だまされりゃあせん」と見ていると、狐は頭にアオミドロを被って娘になり青年の前を通って行った。

ついて行くと、娘は重箱の中へ落ちていた馬糞（ふん）を入れ、風呂敷に包んで長者の家に入って行った。家の者が「久しう来なんだ。子どもも大きゅうなった」と、娘を歓迎する。若者は見かねて、家へ入ったら、そこには下女や下男もいる大きな家だった。

若者は「娘は狐じゃ。だまされちゃあいけん」言うけれど「うちの娘が里帰りしたじゃ」と言う。娘は「たいしたもんじゃないけど、おはぎを持ってきた」と重箱のものを出す。家の者たちは「ご馳走（ちそう）じゃなあ。よばれるじゃわ」と言う。そして娘さんを奥の間に入れ、もてなされる。

若者は「そりゃあ馬糞じゃあ」と言うけれど、家の者たちが怒って「そんなことを言う者は、松の木に縛りあげたれ」と下男2、3人で若者を松の木に逆さまに縛りあげた。苦しくてならないので騒いでいたら、家の奥から坊さんが来られ「これだけ言うじゃけえ、こらえたれえや」と言う。家の者たちも坊さんの言われることなので、若者を木から降ろしてやった。

坊さんは「おまえはこらえてもろうたじゃけえ、一緒に帰ろう」と若者を連れてお寺へ帰られた。「これからわしの弟子になれ」次には「坊主にならにゃ」と言われた。若者は命を助けてもらったからと頭を出した。剃刀（かみそり）を使うと痛くてならないけど、がまんして髪の毛を剃（そ）ってもらっているうち、なにしろとても疲れきっているからよく眠ってしまった。

目が覚めてみれば夜が明けていて、「ここは何じゃろう」と思ってよく見れば、こりゃあ野原じゃ。だまされん言うて来たけど、だまされたじゃなあと思ってわが家にもどり、奥へ入って布団を被って寝ていた。

すると、仲間の青年たちが数人その家にやって来て「どんなや、だまされんと上手にもどったかや」と言うと、若者のお母さんが「もどって寝とるわ」と言うので、仲間たちは「ほんなら行ってみよう」と行って見たら、若者は頭の毛を狐にめちゃくちゃに食いちぎられて、頭から血が出ている。

今回も若者が坊主にされてしまったという話。そればっちり。

イラスト・福本隆男

解説

けっこう各地で好まれて語られている昔話である。読者もどこかで聴かれたことがあるのではなかろうか。

関敬吾『日本昔話大成』によると、この話は本格昔話の「人と狐」の中に「剃刀狐」として位置づけられている。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。